

Toom, Tarmo.

‘Augustine on Ambiguity’. *Augustinian Studies*, 38:2 (2007), 407-433.

上村直樹

言語使用の場面において不可避に生ずる「曖昧さ」(ἀμφιβολία)は、古代の文法学、修辞学、また哲学的な伝統のなかで、たとえば語の発音や統語法、語の意味やその使用の文脈、とりわけ意図的な表現法や誤用といった観点から探求されてきた。これに対して、聖書テキストもそうした「曖昧さ」を内包するとはいえ、解釈者にとっては神の本来的な意図を諒解するための妨げと見なされる。さらに正典テキスト成立に聖霊のはたらきが介在するからには、人間の理解を超えた意味が内在しうる。Tarmo Toom は、アウグスティヌスの「曖昧さ」理解に関わる二つの主要テキスト *De dialectica* 9-10 と *De doctrina christiana* 3.1.1-3.37.56 を取りあげ、「曖昧さ」のタイプ、その原因、また対処の方法について明らかにすることを試みている。まず前者のテキストにおいて「曖昧さ」が書かれたテキストに認められることを確認するとともに、その原因を探る。一方後者のテキストにおいては、古代的な伝統よりもむしろ神学的、釈義的な次元にアウグスティヌスはその焦点を移行していることを確認しつつ、字義的・比喩的な表現を解釈する方法についても検討している。そして、「曖昧さ」の大部分が解決可能であり、そうであるからには解釈者は「曖昧さ」をいかに把握し解明するか、その方法について熟知すべきであると結論づけている。